さびしい姫君

北杜夫

しい姫君

北 杜夫

新 潮 社

さびしい姫君（ひめぎみ）

一九七七年　六　月一〇日発　行
一九七七年一〇月二〇日八　刷

定価八〇〇円

著　者　北（きた）　杜（もり）　夫（お）
発行者　佐　藤　亮　一
発行所　株式会社　新　潮　社
東京都新宿区矢来町七一（〒一六二）
電話　業務部　東京（〇三）二六六－五一一一
　　　編集部　東京（〇三）二六六－五四一一
振　替　東　京　四　－　八　〇　八　番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担でお取替えします。

印刷　株式会社光邦　製本　新宿加藤製本株式会社
© 1977 by Morio Kita. Printed in Japan.

もくじ

第一の前がき……7
第二の前がき……9
第三の前がき……11
第四の前がき……13
第五の前がき……15

第六の前がき……18
第一章　ローラ姫の生いたち……21
第二章　ローラ姫の御結婚……42
第三章　ローラ姫、難儀される……59
第四章　ローラ姫の御離婚……77
第五章　アメリカでの苦労……86
第六章　ヨットの顚末……99
第七章　チューリッヒにて……124
第八章　サン・ポール氏の歯痛……138

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第九章　奇蹟が起る……160
第十章　王さまの行方……175
第十一章　サン・ポール氏、またしても……194
第十二章　サーカスの生活から……213
第十三章　さまざまなことが起る……230
第十四章　チャレンジャー卿のなしたこと……247
第十五章　事件は進む……264
第十六章　めでたしの大団円……282
第一のあとがき……297

第二のあとがき……298
第三のあとがき……300
第四のあとがき……302
第五のあとがき……306
第六のあとがき……308

ヒサクニヒコ　さしえ

さびしい姫君

装幀　ヒサクニヒコ

第一の前がき

沢山の子供たち、そして子供の心を持った大ぜいの皆さん。

この十歳の子供から百歳の子供のための童話も、これで三作目です。そして、今回はこれまで取り残されていたローラ姫を主要な人物として書くことに決めました。

これまでこの童話を書きだしたころには、私の家には犬のコロや猫のミミのほかに、必ずヤドカリがいたことはご存知でしょう。しかし、ヤドカリというものは短命なものです。二代目のヤドカリもとうにいなくなってしまっておりました。

私は縁起をかついで、三代目のヤドカリを飼おうかとも考えたのですが、

「死んじゃうと、可哀そうよ」

と、娘が反対しました。あまつさえ、

「ヤドカリなんてもう飽きた」

ともいう始末です。
それにしても、物語の筋も一向に浮びませんし、原稿用紙に表題だけ書いてから一ヵ月経っても一字も書けませんし、私はなにかきっかけになる小動物を飼いたいと考えました。
思いついたのは、夏に山地へ行ったとき、そこの友人の家で飼われていたミニ・ウサギです。なんでも露店でニュージーランド産の「テーブル・ウサギ」と称して売られていたそうで、エプロンのポケットにはいってしまうくらい小さく、なんだか毛皮のかたまりの玩具のようで、それこそクシャミが出るほど可愛らしい生物でした。
手のひらのなかでじっとしているかと思うと、床に置かれるとチョロチョロと走るのです。
「あれはいい。あれならローラ姫と釣合がとれる」
そう思って家人に相談してみますと、家には猫がいるからとても駄目だという返事でした。リスに対しても同様の答えです。しかも、リスを飼っていたという知人が現われて、
「リスは可愛いです。しかし、なんでも齧る。机でも椅子でも本棚でも、およそ木という木をやたらと齧るので閉口しました」
「本棚もですか」
「本棚どころか、床だってドアだってみんな齧ります。あなたのところは本が多い。本棚を齧られて、本の山が崩れてきたら大変ですぞ」
私はミニ・ウサギもリスもなしで、仕方なしに書きだそうと決意しました。とにかくわが家の家族の一員である犬のコロと猫のミミだけは存在するのですから。
ですが、ちょっぴり寂しい気持もしますし、そのため筆がとても重いのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第二の前がき

この春、娘は中学校にはいり、英語を生れてはじめて勉強することになりました。

そして、

「ディス・イズ・ア・ペン」

「ディス・イズ・ア・ドッグ」

などと盛んに繰返していましたが、なにせ現代は或る児童マンガに「ディソ・イズ・ア・ペン」とか「グエター（ギターのこと）」などという言葉が出てくる世の中ですから、

「ディス・イズ・ア・グッド・ナイト」

なんて言う始末です。

犬のコロは相変らずうす汚れたモップのように横たわっていることが多いのですが、門から誰かがはいってくると、とびあがってヒステリックに鳴き立てました。呼鈴（よびりん）女ならぬ呼鈴犬といってもよいでしょう。

そんなコロを、妻がある日、デパートのペット・コーナーにトリミングしに連れてゆきました。そして、戻ってきたコロの、何という変りようでしたでしょう。

毛は純白のうえにも純白に、いつもよれよれにちぢれていたのが綿毛のようにふわふわしております。まさしく王女さまといってもよい優雅な姿でした。

娘が叫びました。

「もう、これからコロなんて呼んじゃいけないのよ。そう、チャーミング・ビューティフル・エレガント・プリンセス・コロと呼ぶべきよ」
「終りの形容詞の前に、アンドを入れなさい」
と、妻が教えました。
「ミミだってそうよ。ほんとに可愛くって凛々しくて、尻尾がぴんと長くて」
と、娘は申しました。
「ミミは、チャーミング・ビューティフル・アンド・スマート・プリンス・ミミという名前にするわ」
ミミは以前に書きましたように、むしろぶざまなデブ猫です。しかし、このところあまりガツガツと食事をしませんから、お腹の辺りはいくらかスマートになってきました。しかし、断じてチャーミングともビューティフルとも合致する姿恰好ではなかったのです。
けれども、そう長く呼ばないと、娘は機嫌を損ねます。
どうやらこの物語は、シャハジ・ポンポン・ババサヒブ・アリストクラシー・アル・アシッド・ジョージ・ストンコロリーン二十八世王の舌を噛みそうな名前以来、どうも長ったらしさに祟られているようですね。
私は気がめいってきました。
ですから娘がいるところでは、滅多にこの二匹の名を呼びません。
娘が不在のとき、わざと邪険に、
「コロ、コロ」
「こら、ミミ」

と呼びつけて鬱憤を晴らしているといった按配です。
なぜなら、娘の前でうっかり、
「ビューティフル・アンド・スマート・ミミ」
などと言おうものなら、
「違うわよ。チャーミング・ビューティフル・アンド・スマート・プリンス・ミミよ」
などと訂正されて、頭が痛くなってしまうものですから。

第三の前がき

さて、ローラ姫は三歳のとき、ストン王国のストンコロリーン王と結婚なさいました。六歳のとき、お子さまができぬという理由で（当り前ですね）御離婚なさいましたが、当然王妃でいらっしゃられました。
しかし、人々は彼女があまりに年少であったため、ずっとローラ姫と呼んでおりました。それでも、実際は元王妃であったことは確かです。
先だって、日本にエリザベス女王がこられ、たいそうな歓迎を受けられました。やはりエレガントな女王であったからで、大統領くらいではそうはゆきません。
しかし、このエリザベス二世の誕生もごく偶然の事柄から生じたものです。
つまり、彼女はジョージ五世の第二王子ヨーク公の長女として生れたのですが、十歳のとき、ジョージ五世が没して伯父のエドワード八世が即位されました。

そこに有名なアメリカ人シンプソン夫人との恋愛事件が起ります。エドワード八世は、夫人との結婚を決意し、議会に次のようなメッセージを送りました。

「余は元首の双肩に不断にかかる負担が極めて重く、余が今あるそれとは異なった境遇においてのみ堪え得るものであることを心に留めるよう国民に要請したい。余は決して公益を第一とすべき余の責任を無視するのではない。余はもはや有効に、かつ自己に満足を与えつつ、この重任を果すことが不可能であることを自覚したのである」

かくて彼は退位し、ヨーク公がジョージ六世として即位されました。そして第一王女エリザベスが王位継承者となったのです。

一九五二年二月、ジョージ六世は死去され、その日からエリザベス二世の治世が始まります。女王戴冠式は翌一九五三年六月二日、ウエストミンスター寺院において挙行されました。以来、ずっとエリザベス女王は英国民のために多忙な日々を送られています。

彼女は王座についてからの二十三年間に、七十カ国以上を訪問なさいました。いずれも過酷なスケジュールです。

一九五三年から翌年にかけては、五万マイル、百七十日におよぶ英連邦歴訪の旅をなさいました。

その折、女王の行動は、次のように報じられています。

握手、一万三千二百十三回。拝謁、六千七百七十回。勲章授与、五百三十六回。英国国歌奏楽、五百八回。花束贈呈、四百六十八回。演説、二百七十六回。レセプション、百三十五回。舞踏、園遊会、五十回……。

時の英国首相チャーチルは、

「帰還時のおみやげは、サー・フランシス・ドレイク以上だろう」
と述べ、またアメリカ訪問の時、女王の過密スケジュールを見た米高官は、
「これで足が痛んだり、救急班の世話にならなかったら不思議だ」
と、たまげたものでした。
また女王は美容にも注意されています。夫君のエジンバラ公が肥満した女が嫌いだということも理由の一つかもしれませんが、節食療法で八・一キロ減量されたこともありました。
そのときのメニューは、朝食は牛乳、砂糖なしの紅茶一杯、少量のバターつきトースト二片、半熟卵一つ。昼食は魚、少量の鳥肉、サラダ、果物、コーヒー一杯。なんだか「さびしい王様」ストンコロリーン王の献立を思いだしますね。もっとも王様のほうがずっと気の毒でしたけれど。
そしてまた、エリザベス女王の公式名称が、これまた長ったらしいのです。
「神のみ恵みによる大英連合王国と北アイルランドならびに同国の他の領土と領域の女王、連邦の首長、信仰の擁護者であるエリザベス二世陛下」
これまた仰々しくも長ったらしいものではありませんか。

第四の前がき

王妃としてもっとも人々の記憶に残っているのは、モナコのグレース・ケリーでしょう。ジャクリーヌ夫人の評判がすこぶるわるいのに比べ、彼女は敬愛と憧れ(あこが)の的になっております。
もう二十年以上まえ、レーニエ公とグレース王妃の結婚の際に、ジャン・コクトーはこう書き

ました。

「……ぼくはあの二人の結婚を信ずるものだ……ぼくの目は憩う。あの岩塊の上に、あのスタンダール好みの小都会の上に、古風な大砲に防備されているあの前庭の上に……あの宮殿のなかで一人の若い大公殿下が遠い国から来られた金髪の美しい一人の姫君を相手に、伝統そのままのしきたりを守りつづけて生活しようとしているのだ。……王公たちのこの種の結婚には、常に必ず多少の芝居っ気の加わることも……もちろんぼくは知らないわけではない。……だが結婚式の壮麗さが、永遠の恋愛を恋い慕う大衆の期待に沿うてくれるのが嬉しいのだ……それにまたぼくは、この大公が遠く別世界のアメリカくんだりから、一人のアンフィトリット（海の女神）を連れ帰った、あの東洋趣味が好きだ……グレース・パトリシア・ケリー嬢は、すでに第一流の名女優であった。彼女ならだれよりも巧みに、大公妃というこの困難な役割も演じていけるはずだ……」

（下村満子氏訳）

もともとレーニエ公は彼女のファンでありました。それを知った新聞記者が、カンヌ映画祭にやってきたグレース・ケリーを宮殿見物という口実でモナコに連れだし、公ははじめて彼女と直接に会い、そして、早くも翌春には婚約発表という段取りとなったのです。

結婚後、レーニエ公は、

「モナコ国内で、グレース王妃主演の映画の上映を禁止する」

と、布告し、更に妻に映画女優としての活動を一切やめるように求めました。

これはある程度、レーニエ公としてもやむを得ぬ処置でしたでしょう。しかし、モナコに住むグレース・ケリー・ファンにとっては重大問題です。

そこで、あるモナコ人の男性は、国外へ行ってグレース・ケリーの映画を見ようと思い立ちま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.